



登校拒否の予兆研究(その2)：予兆項目の数量的分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学旭川分校障害児教育研究室 公開日: 2017-07-26 キーワード: 作成者: 立山, 文雄, 藤川, 文子, 中村, 貴愛, 石黒, 一次 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007799

登校拒否の予兆研究 (その2)

——予兆項目の数量的分析——

立山文雄* 藤川文子*
中村貴愛* 石黒一次**

現代の児童・生徒をめぐる社会的問題のひとつに、増加の一途を辿っている登校拒否があり、早急な教育的対処を求められている。登校拒否は、今日までにその分類・特徴・治療など様々な角度からの研究が積み重ねられてきた。石黒¹⁾は、これら従来の研究とは視点を変えて児童が登校拒否を起こすまでに示す行動や認知特徴(予兆)の内容を明らかにしようとした。その手段として、登校拒否傾向を測定するための33の質問項目(予兆項目)を作成し、函館市において1,523名の児童を対象に実態調査を行った。

本研究では、上記の調査結果を林の数量化Ⅲ類という統計分析法を用いて分析することにより、小学生の各学年段階における登校拒否の予兆と思われる行動や認知特徴を明らかにするとともに、重要な項目群を選定することを意図した。さらに児童の発達段階をあわせて考えることにより、登校拒否の要因を各学年段階別に捉えようと考えた。

分析の結果、各学年の示す予兆項目群にはそれぞれ差異が認められ、学年段階ごとの予兆の特徴が導き出された。そしてその内容に検討を加えてみると同じ範疇に入る項目群であっても、その項目構成には特徴的な差異がみられ、これは児童の発達段階・認知の違いによるものと推察された。すなわち、一口に予兆といっても学年ごとに特徴があり、それに応じた対応が必要であるという結論に達した。(キーワード:登校拒否, 予兆項目, 学年差)

1. 目 的

現在、わが国では高度経済成長を契機とした様々な子どもの社会病理現象が発生しているが、中でも教育に関わる暴力問題、いじめ、自殺などは次代を担う子ども達の健全な発達という観点から見て早急な解決を必要とするものである。とりわけ、近年増加の傾向にある登校拒否問題は、当事者や家族、学校関係者にとって深刻な状況を呈し始めた。

登校拒否の研究は、今日まで多数の研究者により、分類・特徴・治療などについてなされてきた。しかし、それらの研究は、潜在的登校拒否傾向を示す子ども達の特徴を明らかにする視点に立つものは少なく、この分野は原岡²⁾、石黒¹⁾、中野³⁾らによって先鞭がつけられた程度である。

本研究では、石黒の作成した33の予兆項目(表1)を用いた第1次調査(対象児童:北海道函館市立小学校3校に在籍した1,523名)の結果に対し、統計的分析を施すことにより登校拒否の予兆と思われる項目群の選定を行い、その信頼性を確たるものにするという狙いをもつ。それにより、潜在的登校拒否傾向児の示す予兆の特徴を各学年ごとに明らかにし、早期発見、早期対応を行う上での手がかりを得たいと考えた。

2. 方 法

石黒の第1次調査結果を分析するにあたり、林の数量化Ⅲ類という統計的分析法を用いる。この方法は、33の予兆項目に対して得られた「はい」、「いいえ」(カテゴリー)の反応に、一定の基準に従って適切な数量を与えることにより数量化するものである。つまり質的データを量的データへと変換するものである。このようにして得られた3次元のカテゴリー・スコアのグラフを対象として、これより分析を加えていく。

分析の手順として、第1に各学年ごとのグラフにおいて3次元(軸)の意味を捉え、大まかに登校拒否傾向の予兆の特徴を把握する。次に、軸をクロスさせることにより重要な項目群を選定していく。そして、上記のカテゴリー・スコアのグラフに、数量化された1,523名の児童のスコア(サンプル・スコア)のグラフを対応させることにより、各学年における特徴的な項目群を選定した児童を大まかに捉えることにする。

3. 分析と結果

(1) 各軸による分析と結果

カテゴリー・スコアのグラフにおいて、項目群の分析によって、各軸の意味づけを行った。その結果は、表2

注)本研究は、北海道教育大学情緒障害教育教員養成課程における情緒障害教育研究紀要第3号(1984)に発表された石黒一次「登校拒否の予兆研究(その1)」の後を受けて研究を行ったものである。

*北海道教育大学情緒障害教育教員養成課程

**函館市立中島小学校

に示されるように、1軸は全学年を通じて予兆項目を登校拒否傾向「大」と「小」との2つの項目群に大別する意味をもつと考えられるものであった。2軸は第1学年において「心理不安」と「学校不満」とに項目群を大別し、その他の学年では「友人・対人に関する不適応状況」と「学校回避」あるいは「学校嫌い」とに大別していると考えられる。そして3軸は、第1学年では「友人への不適応」と「学校回避」、第2学年では「学校嫌い」と「心氣的要因」、第3学年では「心理不安」と「友人への不適応」、第4学年では「心氣的要因」と「友人不適応・学校回避」、第5学年では「学校回避」とそうでないもの、第6学年では「学校嫌い」と「心氣的要因」に大別していると考えられ、各学年ごとに心理状態・認知

表1 予兆項目(登校拒否傾向質問項目)

1. あなたは、学校へ行くのが楽しいですか。
2. あなたは、学校を休みたくないとおもいますか。
3. あなたは、学校で勉強するのがうれしいですか。
4. あなたは、朝なんとなく学校へ行きたくないときがありますか。
5. あなたは、学校にいても家のことが気になりますか。
6. あなたは、朝学校へ行くところになって、急に頭やお腹がいたくなることがありますか。
7. あなたは、学校さえなかったら毎日を楽しいだらうとおもいますか。
8. あなたは、学校をよく休むほうですか。
9. あなたは、学校の勉強がおわったら、すぐ家に帰りたいとおもいますか。
10. あなたは、学校にいるとき、さびしいとおもうことがありますか。
11. あなたは、学校のほうが家にいるときよりもきゅうくつですか。
12. あなたは、学校でいやなことはありますかとおもいますか。
13. あなたは、学校の門や玄関が見えてきたら、学校へ行きたくなくなるがありますか。
14. あなたは、寝ぼうしたりぐずぐずしたりして、学校に遅れることが多いですか。
15. あなたは、転校したら、もっと学校が楽しくなるとおもいますか。
16. あなたは、学校の休み時間など、ひとりであることが多いですか。
17. あなたは、朝学校へ行く前に、何度もオジッコがしたくなりますか。
18. あなたは、病気で学校を休んだあと、友達に何か言われそうで、学校へ行きづらくなるほうですか。
19. あなたは、春休みや夏休みのあと、学校へ行きたくなくなるがありますか。
20. あなたは、学校で頭やお腹がいたくなって、保健室へ行くことが多いですか。
21. あなたは、時間割調べや宿題などをきちんとすませないと、とても気になるほうですか。
22. あなたは、学校で班長やみんなの代表になりたくないとおもいますか。
23. あなたは、学校で仲間はすれになることが多いですか。
24. あなたは、学校でわかっていても手をあげたり発表しないことが多いですか。
25. あなたは、学校でいやだとおもっても、友達のいうことをきくことが多いですか。
26. あなたは、学校で自分のロッカーや机の中がきちんとしていないと気がすまないほうですか。
27. あなたは、教室の席が自分の席でないような気がするがありますか。
28. あなたは、学校でたくさんの友達と遊んでいても自分だけ仲間はすれにされているような気がするがありますか。
29. あなたは、学校で何でもないのに口の中がカラカラ乾いているような気がするがありますか。
30. あなたは、学校できらいな勉強がある日は休みたくなるが多いですか。
31. あなたは、給食の好ききらいがたくさんあるほうですか。
32. あなたは、学校へ行く途中、だれかにジッと見られているような気がするがありますか。
33. あなたは、学校で友達が自分の悪口を言っているような気がするがありますか。

表2 各軸のもつ意味

学年	1 軸		2 軸		3 軸	
	-	+	-	+	-	+
1	登校拒否傾向小群	登校拒否傾向大群	心理不安	学校不満	学校回避	友人不適応
2			友人不適応	学校回避	心氣的要因	学校嫌い
3			友人不適応	学校嫌い	友人不適応	心理不安
4			学校嫌い	友人不適応	友人及び学校回避	心氣的要因
5			友人不適応及び心氣的要因	学校嫌い		学校回避
6			学校回避	友人不適応	心氣的要因	学校嫌い

状況等に差異が認められた。

(2) 2軸・3軸のクロスによる分析と結果

2軸・3軸をクロスさせたグラフを基に、各学年ごとにより深い項目分析を行っていくが、それには基本となる項目群の特徴を捉えておく必要がある。そこで、全学年をトータルしたものを始めに分析し、それを基本としながら以下各学年ごとに分析を加えていく。

1) 全学年

図1より、散在している項目を4つのまとまりに捉えることができる。それらを右側上段から右回りに第1群、第2群、第3群、第4群と呼ぶことにすると4つの項目群は次のような特徴をもつと言えよう。

第1群では、⑦学校さえなかったら毎日を楽しいと思う、⑩寝坊やぐずぐずして遅刻することが多い、⑫時間割調べや宿題がとても気になる等の、学校回避的内容を示す項目が集まっている。従ってこの群は「学校回避的傾向」を特徴とするものと言えよう。

第2群では、⑭わかっていても挙手したり発表したりしないことが多い、⑮学校で班長やみんなの代表にはなりたくない等の項目内容を示している。従ってこの群は「内閉的傾向」を示していると言えよう。

第3群では、⑤学校にいても家のことが気になる、⑥朝、登校前に急に頭痛や腹痛がある等の心氣症的な状況を示す項目群が集まっている。従ってこの群は「心氣症的傾向」を特徴的に示していると言えよう。

第4群では、⑩頭痛、腹痛で保健室へ行くことが多い、⑬休み時間など一人で居ることが多い等の対人関係に関わる回避的状態や行動を示す項目が集まっている。従ってこの群は「学校での対人回避的状態」を特徴的に示していると言えよう。

以上の4つの項目群を基本として、各学年における項

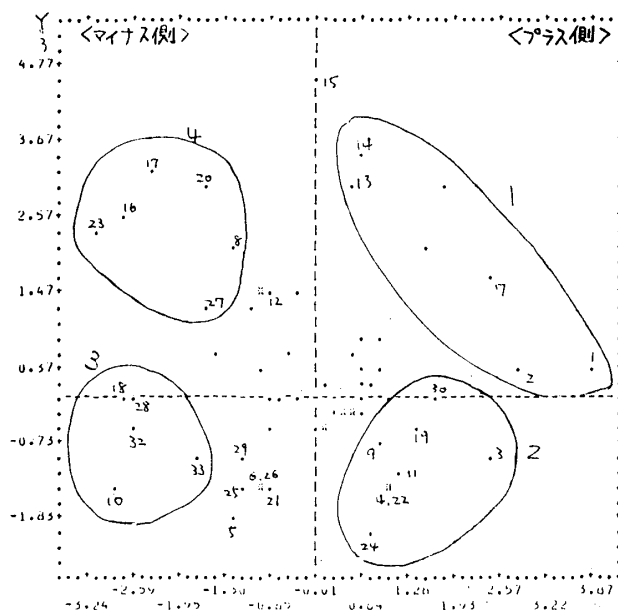


図1 全学年 2×3のグラフ

目群の特徴について順次述べていく。

2) 第1学年

図2のように項目群は大きく4つにまとまっており、これらは全学年のものと比較すると、項目群の構成内容は多少異なるものの、群の構造にはあまり差異が見られない。しかし位置的に見ると全体的にNS群に向かって凝縮しており、群を構成する項目同士の間も強いのと思われる。さらに、項目群の相対的位置が、全学年のそれと比較してNS群を中心に右回転する形をとっている。

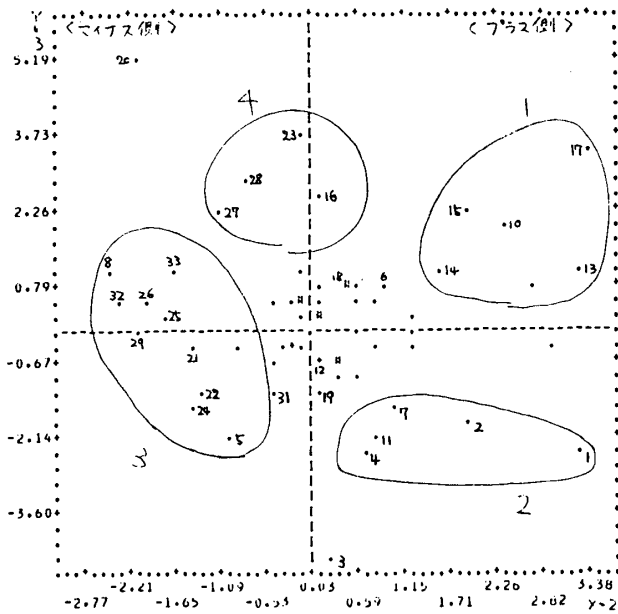


図2 第1学年 2×3のグラフ

3) 第2学年

図3より、3つの項目群に捉えられる。その内容を見ると、第1群は、全学年(図1)での第1群(学校回避の傾向群)と第2群(内閉的傾向群)とが合併したもので、

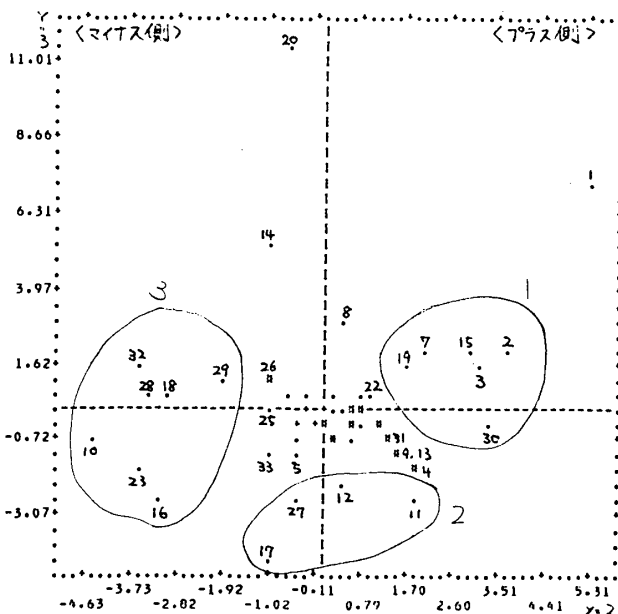


図3 第2学年 2×3のグラフ

第2群は、全学年での第2群と第4群(学校での対人回避状態群)が合併したもので、第3群は、全学年での第3群(心気症的項目群)と同一内容であると考えられる。また、項目群の位置を見るとNS群を中心に右回転する形をとっている。

ところで、項目番号⑩(学校で頭やお腹がいたくなって、保健室へ行くことが多い)は、図3に見られるように他の項目群から突出している。これは、第2学年の全児童242人中、反応率が5.37%と最も低かったことによるものであるが、群の構成に与える影響は少ないと考えられる。

4) 第3学年

図4より、3つの項目群に捉えられる。その内容を全学年と比較した場合、第1群は全学年での第1群と第2群の項目が合併したものであり、第2群は全学年での第3群と第4群の項目が合併したものと考えられる。また、第3群は、全学年における第1・3・4群に属する項目が合併したものであると考えられる。

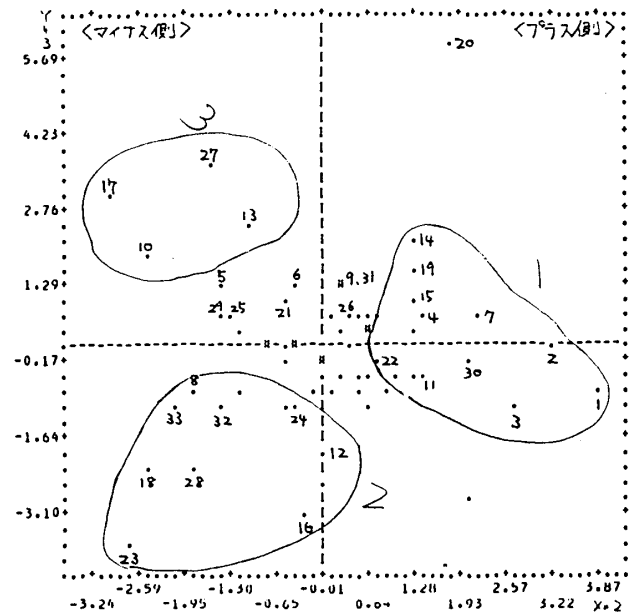


図4 第3学年 2×3のグラフ

5) 第4学年

図5より、3つの項目群に捉えられる。その内容を全学年と比較した場合、第1群は全学年での第3群が移動したものであり、第2群は全学年での第3・4群の項目が合併したものであり、第3群は全学年での第1・2群の項目が合併したと考えられる。

6) 第5学年

図6より、全体を大まかに捉えた場合、3群に大別することが出来る。それらの項目内容を全学年と比較した場合、第1群は全学年での第1・2群が合併したものであり、第2群は全学年での第3・4群が合併したものであり、第3群は全学年での第4群と同じ項目群であると考えられる。

また、第3群は反応率が低かったことにより突出した位置にあるが、第1・2群の項目構成にはさほど影響を与えていないと考えられる。だが形態的に見て、NS群を含む第1・2群がこの影響を受けたことより3軸の方向に凝縮させられたと考えられる。

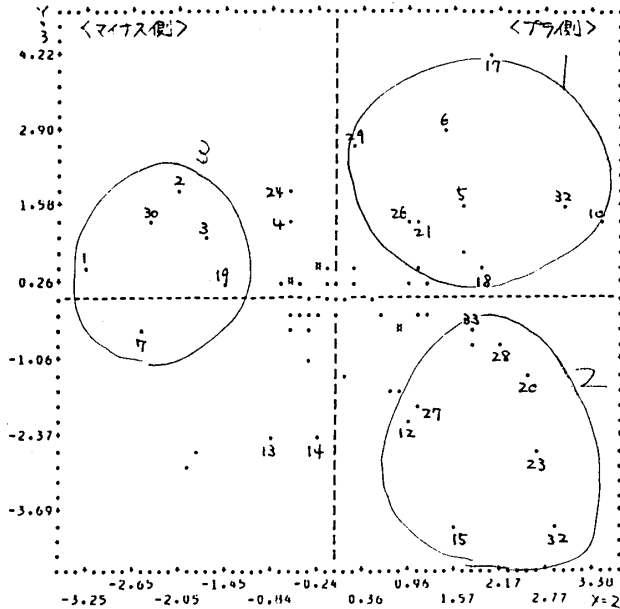


図5 第4学年 2×3のグラフ

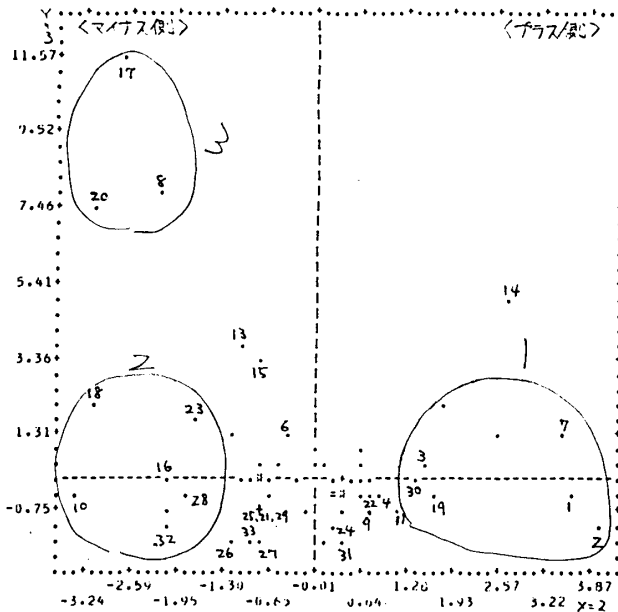


図6 第5学年 2×3のグラフ

7) 第6学年

図7より、2つの項目群に捉えらえる。その内容を全学年と比較すると、第1群は全学年での第3群と同じ項目群であり、第2群は全学年での第3・4群の項目が合併したものであると考えられる。なお、全学年における第1・2群はここではNS群に含まれていることを付け加えておく。

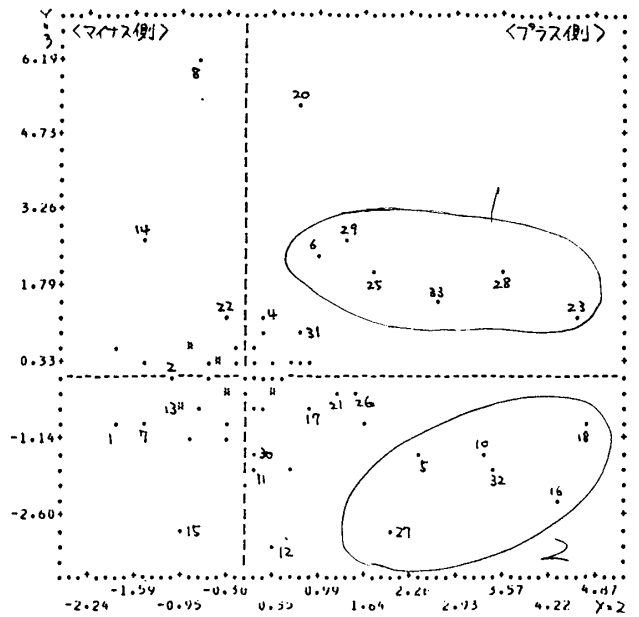


図7 第6学年 2×3のグラフ

4. 考察

以上の分析結果に見られるように、1～3軸のそれぞれの軸には特定の意味合いがあり、ほぼ同義な意味の軸、あるいは各学年によって差異が認められる軸等であることがはっきりとした。また2・3軸のクロス分析により、各学年ごとの特徴的項目群の一部が浮かび上がってきた。そこで、これまでのカテゴリー・スコアの分析結果に児童の発達段階を考慮しながら考察を加えていく。また、サンプル・スコアを用いて、上記の特徴的な項目群を選択した児童の特性を対応して考えることより、多角的な視点からの考察を加えていくことにする。

(1) 第1学年

2・3軸のクロス分析の結果、①全学年と同様に4つの項目群に捉えられたが、それらは全体的にNS群に向かって凝縮した形をとっていること、②全学年と比較して相対的位置が2軸よりに傾いていることの2つの結果が認められる。

これらの背景として、まず①の理由としては、本学年においては就学1年目ということで、就学前の生活と現在の教育体系との間に大きな隔りがあるために子供達の心理状態が不安定であることや、本学年の子供達の発達段階が未分化な状態にあり、学校生活に適応しきれていないために項目が4つに分散したと推測できる。また、就学してまもない本学年においては学校に対する認識が確立されきっていないということから凝縮した形になり、これより全学年と比較して登校拒否傾向が低いということが考えられる。

また②の理由は、2・3軸がクロスした場合、2軸が3軸よりも重要性が高いことから生じたものであると考えられる。これにより、第1・3群が2軸によってはっきりと大別されたことは、本学年においてこれら2つの

群が特徴的であると言えよう。

そして、これらカテゴリー・スコアの分析結果に、サンプル・スコアを対応してみると、第3・4群に登校拒否傾向大を示す子ども達と比較的多く集まっている。つまり、この2つの群が本学年における特徴的項目群と推測することが可能であろう。

(2) 第2学年

クロス分析の結果、3つの項目群が特徴として捉えられその内容は先に示したとおりである。前学年と同様に軸の重要性から2軸の方向に見ると、第1・3群が特徴的項目群として捉えられ、これは全学年での第2・3群にそれぞれ該当する。

また、前学年では4つの項目群が見られたのに対し、本学年では3つの群にまとまりを見せている。これは子ども達が前学年と比べて学校生活に慣れるようになったことが基盤になり、学校に対する認識がある程度まとまり、精神的に安定した状態を得ていることを意味していると考えられる。つまり、分散した不安定な意識構造のまとまりが、項目群の減少につながったと推測できる。

そして、これらの項目群にサンプル・スコアを対応してみると、第3群に登校拒否傾向大を示す子ども達が多く見られ、本学年における特徴的項目群であると推測できる。

(3) 第3学年

クロス分析の結果、3つの項目が特徴として捉えられ、その内容は先述のとおりである。全体的に2軸の方向に2分する形をとっていると言えよう。すなわち、全学年での第1・2群で構成される第1群と、全学年での第3・4群による第2・3群の合併群であり、本学年においては、この2つの群が特徴的項目群として挙げることができよう。この背景には、子ども達の発達段階において本学年がちょうど対人・友人との結びつきを強めようとする時期にあたり、そうした中で心理的葛藤状況が反映したものと推測できよう。

そして、これらの項目群にサンプル・スコアを対応してみると、第3群に、登校拒否傾向大を示す子ども達が多く見られた。これより本学年においては、対人・友人に関する不適応状況の特徴として挙げることができよう。

(4) 第4学年

クロス分析の結果、3つの項目群が特徴として捉えられ、その内容は先述のとおりである。本学年の項目群は構造的に相対的位置関係を示しているが、内容的には前学年とほぼ同様の結果を示している。つまり対人(友人)不適応群と学校回避群に大きく2分されたものになっている。これは本学年が仲間集団、社会的協力を形成していこうとする時期であるにもかかわらず、その発達途上において何らかの障害によって心理的に困惑している状況が現れたものと推測できる。そして、このことが根

底となって学校回避に結びついているのではないかと推測できる。

また、サンプル・スコアとの対比においては、学校回避群に登校拒否傾向大を示す子ども達が多く反応していることから、群構成は第3学年と見かけ上同一であっても、内容的に差異が認められ、学年進行による段階的変化が見られる結果となったと言えよう。

(5) 第5学年

クロス分析の結果、3つの項目群が特徴として捉えられたわけであるが、先にも述べたとおり第3群が極端に反応率が低い項目群であることにより、第1・2群が本学年における特徴群と言えるであろう。すなわち、学校回避群と友人(対人)不適応群の2つの群であるが、本学年における発達段階は友人づくりの意欲旺盛期であり、それによって友人関係がこれまで以上に多様化する時期にあると言える。それならば、そこから複雑な人間関係やトラブルが起こり、心理的葛藤が生ずるのは当然の帰結と言えよう。さらにそれが学校回避につながったとしても不思議なことではない。

そして、これらの群にサンプル・スコアを対応させた結果、他学年と比較して最も顕著な形で登校拒否傾向大の子ども達が反応していることがわかった。

(6) 第6学年

クロス分析の結果、2つの群に捉えられ、これまで他学年においては3つ以上の項目群が特徴として挙げられていたことからすれば、本学年においては学年進行により子ども達の認知能力にまとまりができてきていると言えるのではなからうか。そして、この2群は全学年でいう心氣的項目群と対人・友人回避の項目群であるのだが、本学年において心氣的項目群が特徴として浮かび上がってきた背景には、最高学年としての意識による自己確立の内面と周囲の環境・状況との不一致によって、様々な不安や葛藤をこの時期の子ども達がもっているためと推測できよう。

そして、サンプル・スコアとの対応においても、これらの群に登校拒否傾向大の児童が多く反応していることが見られたことは、本学年における児童が不安定な状態にあることを浮き彫りにしているものと推測できよう。

5. まとめにかえて

本研究においては、数量化Ⅲ類という統計分析法を用いることによって、石黒の行った調査結果を新たな形で分析する試みをしてきたわけであるが、その結果は以下のように要約される。

すなわち、1軸による分析においては各学年を通じて大きく2つの群に分割され、一方は登校拒否傾向大群で、もう一方は傾向小群というものであった。

また2軸による分析においては、第1学年を除いた他

の学年はほぼ同一の内容となり、友人・対人関係に関する不適応状況と学校回避あるいは学校嫌いとを2分する形で項目群構成となっていた。

そして、2・3軸による分析では、各学年ごとにそれぞれ特徴が現れており、第1学年では友人への不適応と学校回避、第2学年では学校嫌いと心氣的要因、第3学年では心理不安と友人への不適応、第4学年では心氣的要因と友人不適応、学校回避の合併、第5学年では学校回避とそうでないもの、第6学年では学校嫌いと心氣的要因、といったように子ども達の心理状態・認知状況には学年により差異が認められる。

次に2・3軸をクロスさせた場合では、全学年のそれと各学年とを比較したが、2軸の時と同様にそれぞれ学年ごとにより特徴が浮かび上がった。

カテゴリー・スコアとサンプル・スコアとの対応分析においても、やはり各学年によりそれぞれ異なった特徴を示す結果となった。

本研究においては上記のような結果・考察を導き出したわけであるが、登校拒否という状態像が子どもによって一人ひとり異なるのと同様に、登校拒否の予兆も各学年によって差異が認められることがわかった。そしてこれらの結果が示す通り各学年での大まかな特徴が捉えられたことは、潜在的登校拒否傾向児の早期発見早期教育の手がかりとなり、日常生活・学校生活の中で児童を観

察し、指導する上での参考資料の一つになると思われる。しかし、今後我々がこの登校拒否の予兆を考えていく場合これらを参考に、各学年ごと・一人ひとりに応じた対応をすることが大切（必要）ではあるが、そればかりではなく、児童の些細な変化や異常に気付くための指導者としての目を養っていくことが何よりも大切であることを忘れてはいけない。そしてそのためには指導者である我々大人、ひいては教師一人ひとりが登校拒否の発生の機序・心理的背景などの予備知識を持つと共に、登校拒否という問題に取り組む強固な姿勢や、児童を受容する柔軟な態度も必要ではないかということをも本研究のまとめとする。

本稿をまとめるにあたり統計分析に多大なご支援を頂いた、本学今川民雄助教授、そして情緒課程の皆様、心より深謝いたします。

文 献

- 1) 石黒一次 (1984) : 登校拒否の予兆研究, 北海道教育大学情緒障害教育研究紀要, 第3号 31-34
- 2) 原岡一馬 (1972) : 登校拒否の要因分析 佐賀大教育学部研究論文集 第20号 67-90
- 3) 中野武房 (1988) : 登校拒否の早期発見と予防, 現代のエスプリ, 250 171-182